

黙示録13章2節 「反キリストの霊」

1A 十字架に來ない満たし

1B 悪魔の誘惑

2B 自分に対する死

3B 幸いな人

2A 高ぶり

1B 自分の目の正しさ

2B 信仰と感覚の混同

3B 敬虔の装い

3A 自分自身への愛

1B 自分の神化

2B 時や法則への憎しみ

3B 福音の真理への憎しみ

本文

黙示録 13 章を開いてください。私たちは、今週と来週にかけて、13 章を見ていきます。来週の午後礼拝で、13 章を一節ずつ見ていきたいと思いますが、今朝は、2 節に注目します。「**私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。**」

私たちは 13 章において、獣の国について見ます。これまでの学びで、天においてキリストの御国が宣言されたことを見ました。「11:15 この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。」それに対抗して、竜、すなわちサタンが、地上に自分の国を打ち立てます。獣こそ、まさに偽キリストです。キリストの御国に取って替る、すり替えの国であります。

私たちは、この世において偽物が数多くあります。その見分けがとても難しくなっていますね。フイッシングサイトであるとか、本物そっくりです。霊的にも同じで、反キリスト的な嘘が至るところにあります。パウロがテサロニケ第二で、「不法の秘密はすでに働いています。(2:7)」と言っているとおりで。空気に触れるかのように、不法の秘密に接している私たちは、それでも真理の道を歩むように召されています。今朝は、その偽物を知って、それでキリストにある真理を知っていきたいと思っています。

1A 十字架に來ない満たし

使徒ヨハネは第一の手紙で、不法の秘密のことを「反キリストの霊」と呼んでいます。「4:3 イエ

スを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていましたが、今すでに世に来ているのです。」イエスを告白しない霊だと言っています。主イエスのお姿、この方の歩まれた道、そういったものを告白しない霊です。

1B 悪魔の誘惑

まず、悪魔が荒野において、イエスにどのような誘惑をしたのかを思い出しましょう。石をパンに変えなさい。次に、神殿の頂から落ちてみなさいと誘いました。それから、世の栄華を見せています。「マタ 4:8-9 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」」イエスは、「4:10 下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」サタンは、アダムに罪を犯させてから、アダムに与えられていた被造物の支配を、自分のものにしました。それで、今、サタンはその全ての栄華を見せて、「私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう」と言っているのです。

イエスは、それに対して「下がれ」と応えられていますが、そのまま、サタンの誘いに乗る者が出てきます。それが、反キリストです。本文を見てください、「**竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた**」とあります。それで獣は、竜のあらゆる力、そして王座と権威が与えられて、世を支配するのです。

2B 自分に対する死

ここに対して何が違うのでしょうか？それは、「十字架への道」です。主イエスは、世をご自分のものとします。神の御子として、全地をご自分のものになります。父なる神は約束されています。「詩 2:7b-8 あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。」ですから、今、サタンにこの世のすべてを与えると言われた時に、主はそのすべての権利を持っておられました。

しかし、拒んだのです。この世をご自分のものとするのは、この世のために代価を支払われるからです。ご自分のいのち、その流される血を代価として初めて、ご自分のものとされるのです。「マル 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

ここが大きな違いなのです。サタンのすることは、「今すぐ」です。その目的は正しいのかもしれませんが。言っていることは正しいのかもしれませんが。しかし、それを、犠牲なくして、愛なくして、忍耐を働かせることなくして、手に入れられると教えるのです。時を待つことなくして、得られると教えるのです。「でも、正しいことなのだから、いいではないか。」とサタンは、そそのかします。

3B 幸いな人

しかし主は、「得るために、与えなさい」「救うために、失いなさい」「高められるために、低くしなさい」と教えられます。自分自身がするのではなく、むしろ自分を退けて、むしろ神が主権をもって働かれるようにしなさい、とされているのです。「自分ではなくて、主」として、明け渡し、譲ります。

このことを見事に教えているのは、山上の説教です。そこで主が宣言された「幸い」です。「マタ5:3-5 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。5 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。」

心の貧しさなんて、だれが求めることでしょうか？いや、心の豊かさが大事でしょ？となりますね。いいえ、心の貧しさを得ると幸いなのです。それは神ご自身の豊かさが、心に満ちるからです。自分の心を豊かにしようとするれば、神の豊かさが味わえないからです。そして、「天の御国はその人たちのものだから」とありますね。霊的には、神の国を味わえますが、それが具体的に実現するのは、将来を待ちます。時が必要です。忍耐が必要です。しかし、必ず与えられます。

同じように、悲しむ人がなんで幸いなんですか？笑っていることの方が、大事じゃないですか？いいえ、自分の罪に対して悲しんでいる時には、必ず神の慰めがあるのです。そして、終わりの日に、すべての涙がぬぐい取られ、過去のもはすべて過ぎ去ります。そして、柔和な人もそうですね。自分の意見や主張を押し通さなければ、自分のものを手に入れられないと思いますが、その逆を行います。そうすると、主が多くのもを自分にお任せになります。そして、終わりの日には地を受け継ぐことになるのです。

2A 高ぶり

獣の特徴を見ていきたいと思います。それを一言で言えば、「高ぶり」です。ダニエルの預言には、「11:36 この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。」とあります。しかし、「彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。」とも、ダニエルは預言しています。高慢は破滅に先立つと、箴言にありますね。

1B 自分の目の正しさ

その高ぶりは、威張り散らすそれだと思ったら大間違いです。私たちは、普通にしていたら高ぶる存在であることを知らないといけません。主イエスにお会いすることによってのみしか、真実な意味で高ぶりは打ち砕かれません。

獣の特徴として、ダニエル 7 章にこうあります。「この角には人間のような目があり、大言壮語す

る口があった。(8 節)人間の様な目です。目は見る事、また知る事に繋がります。自分の目に正しいと思われることを行う時、それが高ぶりの始まりです。

主の目に正しいことではなく、自分の目に正しいことをしていた時代が、イスラエルにあります。士師の時代です、「21:25 そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。」とあります。その自分の目に良いことを行っていた時に、何が起こっていましたか？ミカという人は、母からお金を盗みました。彼はそれを告白したら、母は喜んで、そのお金で彫像と鑄像を作りました。そして、ミカの家には神の宮があり、自分の息子を祭司としていました。そして、ベツレヘムから来たレビ人を、「お金払うから、私のための祭司となってください。」と言いました。そうやってレビ人は雇われました。

いやはや、これだけ混乱しています。けれども、今の時代に言い換えてみましょう。自分の家が教会。それで自分の都合の良い教師をインターネットで見ます。それから、牧師を自分の家に招いて、お金出すから、祈りや聖餐式やってほしいと頼みます。そこで、たとえイエスをあがめていると言ったとしても、事実上、偶像になっているということです。

その他、ベニヤミンの男たちが、他のレビ人のそばめを凌辱して、そのためにイスラエルの中で内戦が起こります。そして、ベニヤミン人が少なくなり、他の部族は嘆きます。部族の存続のために、こう決めました。祭りのために女の子が踊りに来ている時に、そこでかさらっていくのです。このようにして、自分の目に正しいことをしていけば、混乱と悪がはびこるのです。

しかし、同時に聖書には、「主の目にかなう」という言葉が出てきます。例えば、「Ⅱ歴代 14:2 アサは、自分の神、【主】の目にかなう良いことを行った。」とあります。自分の目や正しさではなく、主ご自身と、主が正しいとみなしていることを正しいとするのです。ダビデは、それゆえ神に愛されていました。「Ⅰサム 13:14【主】はご自分の心にかなう人を求め、【主】はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。」とされています。

箴言に有名なみことばがありますね。「箴 3:5-6 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」主に心を尽くして拠り頼むのです。自分の悟り、理解には頼らないのです。すべての道に、主がおられることを認めます。自分の目に正しいことではなく、主が道をまっすぐにされます。

2B 信仰と感覚の混同

そして、獣についてですが、彼は神を冒瀆することが大きな特徴です。5-6 節を読みます、「5 この獣には、大言壮語して冒瀆のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを

冒瀆した。」口から出てくる言葉です。ヤコブは、手紙の中で、口から出てくる言葉で慎しむことを戒めていますね。「3:9-10 私たちは、舌で、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです。私の兄弟たち、そのようなことが、あってはなりません。」

なんで、そんなことになってしまうのか？それは、自分の信仰が、真理に基づいていないからです。自分の思いや感じていることが暴走して、真理から離れたことを口走るからです。偽教師や偽預言者が、教会の中に入ってくることを、使徒たちは手紙の中で警鐘を鳴らしています。ユダが、罵っている人は、権威を認めず、動物のように本能で知ることを口走っていることを、指摘しています。「1:8-10 それにもかかわらず、この人たちは同じように夢想にふけて、肉体を汚し、権威を認めず、栄光ある者たちをののしっています。9 御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて悪魔と論じて言い争ったとき、ののしってさばきを宣言することはあえてせず、むしろ「主がおまえをとがめてくださるように」と言いました。」御使いのかしらミカエルは、悪魔についてでさえ、そこに力があることを知って、自分でののしることなく、主がとがめるようにと控えたのです。「1:10 しかし、この人たちは自分が知りもしないことを悪く言い、わきまえのない動物のように、本能で知るような事柄によって滅びるのです。」

自分の感覚と信仰が混同していることが、危険です。自分の思いを、絶えずキリストに服従させ、そこに現れる聖霊の思いを選び取っていく必要があります。「Ⅱコリ 10:5 私たちは様々な議論と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち倒し、また、すべてのはかりごとを取り押さえて、キリストに服従させます。」神の知識に逆らう高ぶりは、ものすごい勢いで自分の思いに湧き上がってきます。しかし、キリストの権威の下に自分を置き、へりくだって、この方の命令に目を留めます。

3B 敬虔の装い

そして、獣の国であります。来週の午後礼拝でじっくり見ていきますが、それがキリストの御国のパロディ、物まねであることがわかります。父なる神がキリストに全権を与えます。そしてキリストが聖霊によってご自身の栄光を現します。これが神の国です。しかし、獣の国は、竜が獣に、自分の力と権威、位を与えます。そして獣が、別の獣に権威を与え、別の獣が不思議と奇跡を行うのです。このようにして、言いかえれば敬虔を装って、この世のこゝろを行うのです。

終わりの日が困難になるとパウロは教えました。それが敬虔を装ってのことであることを教えています。「Ⅱテモ 3:1-5 終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。² そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒瀆し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。³ また、情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できず、粗野で、善を好まない者になり、⁴ 人を裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快楽を愛する者になり、」ここで止めますが、ここまで読めば、世の中が、教会とは全く別の世界で、このようになってい

ると私たちは思うでしょう。しかし、違うのです。「3:5 見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。」敬虔が見かけなのだという事なのです。

それでイエスは、山上の説教の最後でも警告されたのです。偽預言者が、羊の皮をかぶって狼としてやってくることを言われました。それは、主の名によって、不法を平気で行うからです。何によって見分けるのか？実によって、です。(マタ 7:16-20)どんなに、語っていることが敬虔に聞こえても、霊的に聞こえても、その人の行っていることが、その人が本当に信じていることが明らかになるのです。

3A 自分自身への愛

1B 自分の神化

これらの何が問題なのでしょう？今、読んだところにヒントがあります。2 節に、「自分だけを愛し」とありました。この訳は良くないですね、「自分自身を愛する」としか書いていません。自分を愛することは、私たちは普通に、自然にできているのです。そうではなく、自分自身を愛するように、隣人を愛しなさいというのが、主の教えです。また、心を尽くして、力を尽くして、思いを尽くして、主を愛しなさいと言われます。自分への愛から、神への愛、隣人への愛と移るのです。

結局、自分自身を愛することは、自分を神としています。ある人が、「かつて、神は上にいる存在だったが、今は、自分の中にいる」と言っていました。自分の思いや感じていることが最も大事になり、それが実質、神であるということです。そして、獣は、そうした人々の欲望を駆り立てて、自分自身を愛するように仕向けるので、それで獣があがめられていくのです。

2B 時や法則への憎しみ

神によって、時が定められています。神によって、法則が定められています。しかし、獣は、それらも変えようとします。「ダニ 7:25 いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に乗ねられる。」聖徒たちを悩ますだけでなく、時と法則を変えようとするのです。例えば、男と女の違いですが、それは自分の気持ちで移すことができる、あるいは、自分の選択で、男でも女でもなくなるという思想が、今、世界にはびこっています。しかも、それが少数派の権利という美名のもとで語られます。

神には秩序があります。もちろん例外があります。主は例外の人に心を留めておられます。恵みがあります。しかし、例外があることは、秩序が意味がないということではないのです。むしろ、全体のまとまりがあるからこそ、例外的な人たちに憐れみを示すことができるのです。

律法について、イエスは廃棄してはいけないと言われました。例えば、姦淫の現場で捕らえられた女がいましたが、「罪のない人が、まず石を投げなさい」と言われました。けれども、「ヨハネ 8:11

わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。」と言われました。秩序は変わりません、しかしそこから外れた人に、憐れみを示すのです。しかし、反キリストなら、「そもそも姦淫と呼んで、罪とするからいけないのだ。全てのことは許されている。」と教えることでしょう。秩序そのものを変えてしまうことが、反キリストのしわざ、悪魔の惑わしです。

3B 福音の真理への憎しみ

最後に、どうして人々は、反キリストにある悪魔の偽りを受け入れていくのか？を考えてみたいと思います。ここ 13 章でも、人々は獣に従い、竜を拝んでいるとあります。パウロが、テサロニケ第二でこう言っています。「2:9-11 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、10 また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。11 それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。」自分を救う真理を、愛をもって受け入れなかったとあります。それゆえ、サタンの惑わしによって、偽りを信じるようになると言っています。

ここで大事なのが「愛」です。しかも、自分を救う真理への愛です。福音の真理への愛です。福音は、教えます。私たちひとりひとりが、神の前に罪を犯したと。私たちは、神の前で罪人です。このことを受け入れるのには、へりくだりが必要です。自分が罪人であることを認めることを、キリストの十字架は教えています。なぜなら、キリストは、私たちの罪の身代わりに死なれたからです。そして、自分はキリストにあって死んでいることを認めます。それから、キリストは三日目によみがえりました。そして、この方がよみがえられたことを信じ、受け入れます。これによって、もはや自分が生きているのではなく、キリストが自分のうちに生きておられることを認めます。自分の人生に、キリストをお迎えするのです。この方に、人生や生活の主導権をゆずります。そして、この方を、自分の主とあがめて、生きます。

ここには、葛藤があります。自分の目に正しいと見えることと、異なるように生きなければいけません。自分の感情にはそぐわないことがあります。そして、時があるので、忍耐して待つことが要求されます。しかし、愛というのは、優先順位です。選択です。そういった自分の思いや考えがあってもよいのです。けれども、それを優先させず、それでも、主の言われたことに留まるのです。それが、「自分を救う真理を愛をもって受け入れ」ることです。